

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

吉村靖孝 建築家

Yasutaka Yoshimura / Architect



CREATOR^{No} INTERVIEW 164

吉村靖孝 Yasutaka Yoshimura

1972年愛知県豊田市生まれ。1995年早稲田大学工学部建築学科を卒業、1997年同大学院修士課程修了。1999-2001年文化庁派遣芸術家在外研修員としてオランダのMVRDVに在籍。2005年吉村靖孝建築設計事務所を設立。2013-18年明治大学特任教授。現在、早稲田大学教授。

吉岡賞（2006年）、アジアデザイン賞（2009年）、グッドデザイン賞特別賞（2010年）、住宅建築賞金賞（2010年）、JCDデザインアワード大賞（2011年）、日本建築学会作品選奨（2011、2014、2018年）、AP賞（2014年）、WADA賞（2016年）、日本建築設計学会賞大賞（2018年）など受賞多数。

主な著作に『超合法建築図鑑』（2006年／彰国社）、『EX-CONTAINER』（2008年／グラフィック社）、『ビヘイヴィアとプロトコル』（2012年／LIXIL出版）など。

NO

164

吉村靖孝

建築家

YASUTAKA YOSHIMURA / Architect

体験と同じくらい大切なのは、想像力を育てること。



クリエイターインタビュー

『高低差のある六本木の街を、階段で縦横無尽につないでみる』

published_2025.01.22 / photo_tada / interview_rumiko inoue / text_ikuko hyodo / edit_shawn woody motoyoshi

多角的な視点で、現代社会における建築の可能性を模索する、建築家の吉村靖孝さん。TOTO ギャラリー・間で開催されている《吉村靖孝展 マンガアーキテクチャ—— 建築家の不在》は、吉村さんの7つのプロジェクトを7人の漫画家がオリジナルストーリーにするというユニークな試み。展覧会のステートメントにもあるように、吉村さんは2年ほど前に脳出血を発症しており、本展を創り上げる期間と、病気が治癒する期間が図らずも重なった。なぜ漫画なのか、そして「建築家の不在」とは一体どういうことなのか？ 展覧会の開催を迎える吉村さんにお話をお伺いしました。

漫画と建築の親和性を読み解いていく。

TOTO ギャラリー・間で開催される《吉村靖孝展 マンガアーキテクチャ—— 建築家の不在》では、僕が手がけた7つの建築に関する作品を7人の漫画家に描いてもらい、そこから内容を広げています。ギャラリーから声をかけてもらったのは、今から2年近く前。その頃、脳出血を発症したために2カ月半ほど入院生活を送っていました。そして退院した直後に、展覧会のお話をいただいたんです。それから少しずつ準備をしてきて、現在に至っています。



《吉村靖孝展 マンガアーキテクチャ—— 建築家の不在》

吉村さんが手がけた7つのプロジェクトを、漫画家7人がそれぞれのストーリーとして描き下ろすことにより、建築の新たな解釈の可能性を探る。「吉村さんは既存の常識を疑いながら、批評性を持って建築を提示してきた方。『建築はひとりのものではない』と言い続けてきた吉村さんの作品に、他者が介入することで本人も考えていなかったものになるかなど。吉村さんがいたから実現できた企画であり、このダブルミーニングが面白いと思っています」と本展のキュレーター。TOTOギャラリー・間にて、2025年1月16日(木)～3月23日(日)開催。

展示の構成について説明すると、3階が漫画のフロアになっていて、7人の漫画家による作品を拡大して展示し、全編を読めるようにしました。フロアの中央では、展示されている漫画からインスピレーションを得て、再解釈したものを建築模型にしています。なので、3階は漫画、4階は模型と表現方法は異なりますが、ベースになっている建築作品を展示している仕組みになっているんです。テラスでは、等倍に拡大したスケールフィギュアを11体展示しています。スケールフィギュアは、建築パースに人を加えて、イメージを湧きやすくするためのものであり、どれも今まで手がけた作品で実際に使っていたものになります。



7人の漫画家

コルシカ × Nowhere but Sajima (2008年)、川勝徳重 × Red Light Yokohama (2010年)、徳永 葵 × 窓の家 (2014年)、三池画丈 × フクマスベース (2016年)、宇曾川正和 × ホームトゥーゴー#001 (2019年)、メグマイルランド × 滝ヶ原チキンピレージ (2021年)、座二郎 × VERTIPORT (進行中) が創意を尽くして描く。
画像: © Nacása & Partners Inc.

そもそも漫画というアイデアは僕から提案したのではなく、どういう展示にしていきたいか、その取っ掛かりを考えるワークショップのなかで、たくさん出てきたキーワードの中のひとつだったので。僕自身は、漫画についてそれほど詳しくないのですが、そういう人でも漫画ならそれなりに読んでいたりするし、まったく興味がないという人はなかなかいない媒体ですね。今は、本の売上げの4割くらいを漫画が占めていると聞いたことがあります。大抵の人にとって身近な存在といえる漫画を題材にして、何かできることはないのかなと考えました。

理由はわかりませんが、建築家を目指している、あるいはすでに建築家だけれども、もともとは漫画家になりたかったという人も結構いるみたいで。たとえば、TOTO出版から出ている『HOLZ BAU 増補版 ホルツ・バウ 近代初期ドイツ木造建築』という本には、建築家の描いた漫画が挟み込まれていたりします。今回の展覧会のような、大々的なコラボレーションは初めての試みかもしれませんが、漫画と建築は意外と相性がいいのではないのでしょうか。



『HOLZ BAU 増補版 ホルツ・パウ 近代初期ドイツ木造建築』

近代初期のドイツ木造建築の知られざる名作を日本の建築家がリサーチした、創造的探求の記録。著者の福島加津也、富永祥子、佐脇礼二郎は建築家。本橋仁は建築史家。ところどころに入っているカラーの漫画(ドローイング)は、漫画家としての実績もある富永祥子手がけている。2020年の発売後、即完売となり、増補版がTOTO出版より2022年に出版された。

「建築家の不在」が意味すること。

僕の建築を作中に出さなくても良いと、漫画家のみなさんに依頼するときにお伝えしました。というのも、4階には種明かしともいえる模型があるので、3階の漫画からは、どんな建築なのかわからなくても構わないと言ったのですが、あがってきた漫画を見ると、結局みなさんが作品のなかで取り上げてくれていました。僕の建築が、漫画というフィクションの世界に存在していることがとても新鮮で、僕自身もそこから想像を広げてみたいと思えるような素晴らしいものでした。

展覧会のタイトルに「建築家の不在」というフレーズを入れたのは、僕の脳出血にも由来しています。発症して間もない頃は、言葉が出てこないような状態だったのですが、それがだんだん治っていく過程と、展示の準備の過程がぴったりと重なっていました。建築家が不在のまま展示をすることはできるのだろうか、という問いがこのフレーズの始まりなんですけど、僕が脳出血にかかったことも漫画家に報告したうえで、漫画を制作していただくことができました。そもそも、建築家の不在とは何なのか。つくる側に意図があるかどうかは関係なく、建築家が独自の作家性を獲得しているかもしれない、という仮説に対して、僕の想像を超えてくる部分が多々あって、面白いと感じました。

もちろん、その建築自体に作家性があるかどうかという話でもあって、僕自身が作家性を出せるかわからないままやり取りをしていくなかで、それが消えてしまった先にどんな建築が存在するのかを見てみたいという気持ちもありました。結果的には、それでも作家性は「ある」と思ってしまったのだけど、作家性が消えていくプロセス自体を楽しむことができたと思います。



published_2025.01.22 / photo_tada / interview_rumiko inoue / text_ikuko hyodo / edit_shawn woody motoyoshi

それでも消えない、作家性。

本来、僕は作家性を出したいと思っている建築家ではなく、それは消えていくものだろうと普段は考えています。とはいえ、それでも消せない部分がある気もしています。今回展示される7つの作品をまとめて鑑賞すると、作家性としか言いようのないものが見えてきて、作家性を消したい自分と、出したい自分の両方が共存しているのかなと思ったのは、新たな発見ともいえます。

どんな作家性を感じたのかというと、たとえば、僕は建築を複製することに対して抵抗が全然なくて。そう考える建築家はあまりいないんじゃないかと思うんです。僕が手がけたいくつかの建築は、複製することを前提にさえしていて、それゆえに敷地がなかったりします。だから移動も可能だったりするのですが、実はそういうところに僕の作家性というものがあるのかなと。

脳出血を発症して、この2年で起こったこと。

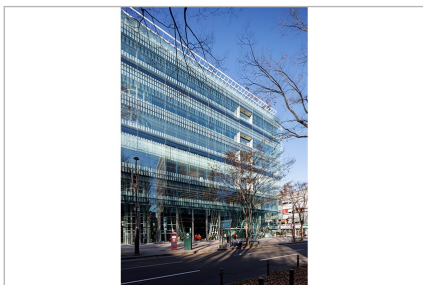
脳出血を発症したのは、2年前の1月14日です。展覧会の始まる日が2025年1月16日なので、まさに2年を越えた頃になりますね。発症直後は、本当に何もできませんでした。まず言葉が出てこなくなって、失語症と診断されました。でも、この2年間でだいぶ治ってきているので、いつか完治するんじゃないかと思っています。今は何よりも治ることが一番大事だと思っているので、そこに100%のエネルギーを費やしている状態です。脳出血になる以前の睡眠時間は1日4時間くらいで、ショートスリーパーと言っていたくらいだったんですけど、今はその倍は寝るようになりました。人間にとって睡眠は大事ですね。

病気の前後で、人生観や建築家観みたいなことがどう変わったのかも、今はあまり考えないようにしています。なのでこの2年間で大きく変わった価値観や心境などは、それほどないと思っているのですが、みなさんがやっていることを俯瞰的に素晴らしいと思うようになりました。あらゆる人が当たり前に行っていることを、すごいなって思うんです。展覧会の準備でずっとやり取りしてきた TOTO ギャラリー・間のみなさんもそうですし、こうやって取材してくれている六本木未来会議のスタッフのみなさんも。自分が全然できないからこそ、そう思います。

カーデザイナーを夢見て、建築学科へ。

僕は愛知県豊田市出身で、父が車のエンジニアだったこともあり、大学に入る前は車のデザイナーになりたかったんです。カーデザイナーとして活躍している人の経歴を調べてみたら、建築学科出身の人が複数いたので、建築学科に進学しました。そうしたら建築が面白くなって、やめられなくなっちゃったんです（笑）。量産する建築に抵抗を感じないのは、量産される車と感覚が一緒なのかもしれません。豊田市にあった巨大な駐車場に、出荷を待つカローラなどがズラッと並んでいる風景を、子どもの頃に見ていましたからね。みんな同じようできて、ちょっとずつ違うから、それもいいなと思っていたんです。

建築の道へ進むことになったきっかけのひとつに、せんだいメディアテークのコンペがあります。現在の建物は伊東豊雄さんの設計で、学生時代に師事していた古谷誠章先生のものでコンペに参加して、僕たちは2等だったんです。今思うと紙とかもぐちゃぐちゃだったんですけど、これを読み取ってくれる人がいるんだという嬉しさと、1等になれなかった悔しさで、建築をやめられないなって。



せんだいメディアテーク

建物は、地下2階、地上7階。仙台市民図書館、ギャラリー、会議室、カフェ、ミュージアムショップなどが入り、美術や映像文化の活動拠点であると同時に、すべての人々がさまざまなメディアを通じて自由に情報のやりとりができるようお手伝いする複合公共施設。身体的な障壁、性差、年齢差、言語障壁などさまざまな社会的な隔たりを「使う」という立場から調整する「場」を提供する。設計は株式会社伊東豊雄建築設計事務所が担当した。

提供：せんだいメディアテーク



吉村靖孝 建築家

Yasutaka Yoshimura / Architect

published_2025.01.22 / photo_tada / interview_rumiko inoue / text_ikuko hyodo / edit_shawn woody motoyoshi

人口オーナス期でもワクワクできる建築を。

複製することを前提とした建築の一例ともいえるのですが、これからの社会に対応するためのプロジェクトとして、今、空飛ぶクルマの空港を手がけています。4人乗りくらいの空飛ぶクルマが離着陸できる場所で、飛行機の空港と比べると圧倒的に小さいです。コンテナを使って自由に組み替えられたらいいなと思っています。なので、この敷地ではこういう形だけど、ほかの敷地に行ったら別の形になるというようなことを考えて、計画しているのが特徴といえます。今までの歴史を振り返ると、人口が増えるときに良い建築と言われるものがたくさんつくられてきたのですが、人口が減る局面もこれからは楽しまないと、建築家はやってられないんじゃないかと思っています。日本は人口減少期ですし、中国でも今後は大幅な人口減少、いわゆる人口オーナス期が待っています。オーナス期にも対応可能な建築を先行して考えたほうが、将来的にメリットがあるでしょうし、空飛ぶクルマの空港もそのひとつとして捉えています。

サステナビリティは、もともとは建築家によって提唱された言葉といわれています。資源をある程度使うのは致し方ないことですし、地球環境を壊さず、資源を使いすぎず、良好な経済活動を維持し続けるという意味があります。いまやあらゆる設計を考えるときに、建築家は当然のこととして意識していることでしょう。一方で、最近ではさらに厳しい条件として、ゼロエミッションというような「まったく使わない」ことを良しとする風潮にもなっていて、本質的にはちょっと窮屈な感じもしています。はたして建築がゼロエミッションを達成できるのかと考えると、なかなかハードルが高い課題ですよ。



空飛ぶクルマの空港

現在進行中の次世代エアモビリティのための空港《VERTIPORT》。コンテナを活用し、今後の拡張の可能性を持たせている。

画像:VERTIPORT ©Yasutaka Yoshimura Architects (progress)

六本木の街に階段を張り巡らせてみたい。

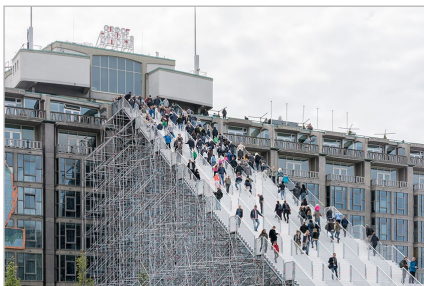
MVRDV というオランダの設計事務所で働いていたこともあり、ロッテルダム の再建 75 周年を記念して彼らが街なかに階段を制作したプロジェクト《The Stairs to Kriterion》に興味がありました。たとえば、かつて映画館だった建物の屋上につながる仮設の階段をつくって、屋上で映画を上映したり、駅前の広場と隣のビルの最上階を階段でつないだり。ロッテルダム市内のいくつかの場所で展開しているのですが、こういうプロジェクトは六本木にも合っているんじゃないかなと思います。六本木にはいろんな高さのビルがあるので、街に階段が走っている様子を超高層ビルから見下ろすこともできるだろうし、中層ビルの屋上から、さらに別のビルへとつなぐような階段が、張り巡らされたら面白いですよ。道路をまたいでつくるのは難しいかもしれないけれど、ロッテルダムのプロジェクトの場合はそれほど長くない階段もありました。TOTO ギャラリー・間の周りなどもそうですが、六本木周辺には工事中の敷地も多いので、それらをうまく使うのもいいかもしれない。



MVRDV

オランダのロッテルダムを拠点とする建築家集団。1991年設立。名前の由来は事務所設立時のメンバー3人の頭文字から。代表作は「WOZOCO / 高齢者のための100戸の集合住宅『オクラホマ』」(アムステルダム、1997年)、「ミラドール」(マドリード、2005年)など。吉村さんは1999年～2001年に、文化庁派遣芸術家在外研修員としてMVRDVに在籍した。

画像: MVRDV founders ©Erik Smits



The Stairs to Kriterion

2016年、ロッテルダム復興75周年を祝いオランダの建築チームMVRDV が、ロッテルダム中央駅からGroothandelsgebouwの屋上まで「クリテリオンへの階段」を建築した。

画像: MVRDV The Stairs to Kriterion 5 ©Ossip van Duivenbode



吉村靖孝 建築家
Yasutaka Yoshimura / Architect

published_2025.01.22 / photo_tada / interview_rumiko inoue / text_ikuko hyodo / edit_shawn woody motoyoshi

新陳代謝の激しい都市、東京のローカリティ。

東京建築士会が主催する「住宅建築賞」の審査委員長を務めているのですが、2023年と2024年は「東京のローカリティ」というテーマで作品を募集しました。「東京のローカリティ」というテーマなのにも関わらず、2024年に入賞したのは、神奈川、埼玉、千葉、東京と、テーマである東京が一件だけだったんです。なので、東京のローカリティは、いまやその周辺なのだと思います。東京の住宅が今どうなっているのに関心を持ちました。たしかに、東京都内での住宅の仕事って今はほとんどないので、だからこそやってみたいと思ったんです。結局は、買える土地が郊外に移ってしまっているということなのでしょうけど。逆説的ではありますが、東京にローカリティがないということが、東京のローカリティと言えるのかもしれない。マンションももちろん住宅に含まれますが、60年代、70年代のマンション開発は、斜面地などちょっと特殊な条件が多かった印象です。その点、現在は超高層マンションばかりで、街の魅力が薄れてしまっている。



住宅建築賞

一般社団法人東京建築士会が主催する、東京圏に建築された住宅を対象とした賞。新人建築家の登竜門として定着している。吉村さんは2010年に「Nowhere but Sajima」で住宅建築賞金賞を受賞。現在は審査委員長を務めている。

画像: Nowhere but Sajima ©Yasutaka Yoshimura (Kanagawa, 2008)

とはいえ、世界で一番好きな街をあげるなら、やっぱり東京なんでしょうね。東京は帰ってくるところ、という感じがしますし、ずっと進歩し続けているのも、すごいことだと思います。2006年に『超合法建築図鑑』という本を書いたのですが、そのときに調べた建築や街並みは、もうほとんど残っていませんからね。今も変化の途中といえますが、東京がこの先どうなっていくのかは興味がありますし、いつまでたっても飽きることのない、新陳代謝の激しい都市だと思います。



この間、中国の青島に初めて行き、デベロッパーが倒産してしまったために建物がつくりかけの状態で見捨てられた廃墟を見ました。ジャン・ヌーベル設計の美術館も廃墟のなかに建っているんですけど、構造的な工夫があって非常に面白く、やる気満々な建物でした（笑）。そういう建築を見に行くことを目的にした、旅もいいですよ。東京の建築は、いろんな名前がついてはいるけれども、同じような化粧を施しているイメージなんです。その点、青島の建築は全然違いましたし、そういうエッジが立つような、街や国であってほしいなと思います。

撮影場所：『吉村靖孝展 マンガアーキテクチャー——建築家の不在』（会場：TOTO ギャラリー・間）

取材を終えて……

発話する際、思ったように言葉になりきれない部分もまだまだ残っているというけれど、それでもたくさんの言葉を紡ぎ出してくれた吉村さん。話すこと、歩くこと、食べること… 日常をあたりまえに生きられていることが、あたりまえであることがとても特別なことなのだと再認識するきっかけをいただきました。建築は、毎日を暮らすわたしたちの傍らに常に存在しています。非日常的な経験から、日常へのまなざしを新たにされた吉村さんがこの先生み出していく建築を、これからもずっと見続けていたいと思います。(text_rumiko inoue)